
平成 27 年

1 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

活力ある新産地づくり

東濃農林■多治見市 たじみ野菜づくり塾と今後の方向

1月15日、たじみ野菜づくり塾の最終講義と閉講式を行った。4月から全11回の講義・実習と延べ53回の圃場管理（はたけ当番）を実施し、自由参加にも関わらず平均出席率は80%以上、皆勤賞14名と最後まで充実した塾運営となった。最終の講義では実習圃場の栽培結果を示し、限られた面積で如何に収穫を上げるか、また農地の権利取得方法やアンケート調査についても実施した。

閉講式後は、参加者一人一人から感想や意見を述べていただいたが、塾参加により「我流であったものが目覚めた」、「穫れるようになった」、「義務感で行っていた畑の管理に興味を持てるようになった」、「直売所や塾で顔見知りが増えた」など前向きな話が多く聞かれた。次年度は、新たに直売所出荷会員の研修を想定したコースも設け、厳寒期の野菜実証品目を増やすなど、多治見の野菜づくりと地産地消の基盤をさらに固めていきたと考えている。



【たじみ野菜塾づくり塾皆勤賞の表彰】

売れる農畜産物づくり

岐阜農林■普及活動 平成26年度岐阜地域普及成果検討会を開催

1月29日、岐阜県水産会館において、普及活動成果検討会を開催し、農業者及び関係者約70名が参加した。

農業普及課からは、水田を守るための営農、いちご産地復活の方策、柿の担い手育成の3課題について事例報告した。

講演会では、農業の6次産業化の動きを踏まえた「成功事例に学ぶ～魅力的な農産物づくりと販売方法～」について学び、農家には難しいと思われる6次産業化もこれからの農業経営には必要な考え方であると、好評であった。



【6次産業化に関する講演】

可茂農林■いちご いちごの安定生産に向けた取り組み

可茂いちご生産組合協議会では、今年度20戸約2.3haのハウスで濃姫、紅ほっぺが作付されており、名古屋市北部市場や地元可茂公設市場に出荷している。

可茂地域のいちご生産者も高齢化で減少しており、産地が縮小する中で、農業普及課では協議会活動の活性化を支援しており、研修会等を通じて基本的な栽培管理の励行、生産者間の技術交換などを行い、生産量の維持に取り組んでいる。

今作では、8月の日照不足で育苗管理に苦労したしたが、その後の天候は順調で、例年並みの12月上旬から出荷が始まった。12月は低温傾向で、やや生育や果実の着色が遅れていたが、現在は安定した出荷となっている。

1月の厳寒期には草勢の低下が心配されるため、農業普及課では巡回活動を中心に草勢維持に向けたハウス内の温度管理や肥培管理の確認、改善指導を行うとともに、病虫害防除の徹底で、安定出荷を支援している。

また、今年度は、更なる安定生産に向けて、通風筒を用いた正確な温度測定によるハウス内の適正な温度管理と、CO₂データロガーによる炭酸ガス濃度の測定で効率的な炭酸ガス施用に向けた調査研究を行っており、こうした技術の普及を目指している。



【いちご共進会
地方審査の様子】

1月20日には、可茂農林事務所で第40回となる岐阜県いちご共進会の地方審査を行った。農業普及課、農業振興課の職員が審査員として、生育状況や管理状況を審査した。審査は場では、草勢を維持し安定した出荷を目指す生産者の努力が見られた。地方審査の結果をもとに、2月上旬に可茂地区の県審査が行われる予定である。

いちごの出荷は5月まで続くため、農業普及課では、長期安定出荷により生産量を確保できるよう、今後も研修会や巡回指導により支援を行っていく。

恵那農林 ■ 夏秋トマト、なす

個人面談を生かし収量・収益アップを目指せ！ ～三者面談の実施～

農業普及課はJAと連携し、1月から夏秋トマト・なすの両協議会員を対象に、地区別の個人面談を行ってきた。

26年度産の栽培経過を確認するとともに、戸別の出荷実績表をもとに個別面談を行い、どこに問題や課題があるのか、27年度産に向けてどのような目標をもって、どのような改善を実施するのかなど今後の取り組む内容を話し合ってきた。

また、栽培履歴を活用し、問題となった病害虫の発生要因や次年度対策について指導を実施している。

JAからは、次年度の作付面積や品種の確認を行うとともに、今年度実施したGAP監査の結果や改善指導も行っている。

27年度産へ向かって、夏秋トマト・ナスの協議会員の収量・収益アップに向けた取り組みは既に始まっている。



【三者面談の様子】

農業経営課 ■ 野菜

平成27年度普及活動で土壌水分の安定化技術を実践

県内の野菜産地は、近年の温暖化傾向や異常気象により、生産が不安定となっていることから、今まで以上に土壌改善に取り組む必要があり、特に土壌水分の安定は野菜生産の最も重要な対策の一つである。

そのため、簡単に取り組むことができる「pFメーターを用いた灌水管理」について、県内産地の優良事例を紹介しながら、品目別の県担当者会議や全農主催の生産販売会議をはじめ、各地域の栽培研修会、広報等で、普及指導員や生産者に実証・普及の推進を行ってきた。

その結果、平成27年度普及計画において、夏秋トマトを中心に、冬春トマト、夏いちご、アスパラガス等、県下広域で実証や普及活動で取り組むことになった。また、その他品目についても、普及指導員等に個別に提案を行い、さらなる推進を行っていく。



【pFメーターを用いた灌水管理】

戦略的な流通・販売

揖斐農林 ■ 茶

第68回関西茶業振興大会岐阜県大会 揖斐川町実行委員会の設立

揖斐川町では1月13日、5生産組合、関係機関からなる標記実行委員会を設立した。これは茶業の振興と需要促進を期し、大会の推進を図るとともに会員相互の連絡融和を図ることを目的に設立されたもので、品評会最高位の農林水産大臣賞及び産地賞の獲得、開催県としての存在感を十分に発揮し、高品質な「美濃茶」を発信するため、大会開催・産地のPR、出品茶づくり、消費拡大イベント等を推進する。

揖斐川町では春日地域を含め「美濃茶」上位独占を目標



【設立会議の様子】

としたモデル展示ほか 14 ヶ所に設置され、本番に向けた取り組みを既に開始している。農業普及課では巡回指導を強化しながら栽培、摘採・加工指導を中心に引き続き支援を行う。

多様な担い手育成・確保

西濃農林 ■ 普及活動成果

西濃農業の活性化をめざすセミナーの開催

1月27日に「西濃農業の活性化をめざすセミナー」を管内の土地利用農家を中心とした130人の参加を得て開催した。

農業普及課より「小麦新品種「さとのそら」の導入に向けて」と題して耐病性及び品質に優れた新品種の導入経緯について報告した。また、「西濃地域におけるイチゴの生産振興に向けて」と題してイチゴの担い手育成及び炭酸ガス利用等についての取り組みを報告した。



基調講演として岐阜県指導農業士の竹川初美氏を招き、「トマト生産による地域を守る若い担い手の育成」と題して、あすなる農業塾長として、トマト新規就農者の研修及び地域への就農支援を行ってきた事例について説明された。

また、JAにしみの営農指導活動報告として「担い手ニーズに対応した肥料への取り組み」として、新規肥料開発等について報告がなされた。

中濃農林 ■ 普及活動成果

「ひらく農業・中濃」を開催

1月29日、普及活動成果発表会「ひらく農業・中濃」を地元県議会議員を始め、農業関係者約100名の参加のもと開催した。本会を「担い手育成プロジェクト1000」の一環と位置付け、テーマは「新規就農者の定着に向けた支援」とした。



【森氏事例発表風景】



【都築氏講演風景】

就農3年目で、「夏秋なす、さといもの複合経営」を行う若い新規就農者から現状と将来方向について発表いただいた後、農業普及課からは、円空さといもの産地振興に係る本年度の活動成果を報告した。

最後に、愛知県阿久比町でコメと野菜による農業経営を大規模に展開する有限会社 千姓 代表取締役 都築氏から、自社が行う「独立支援事業」が担い手の育成、確保とともに耕作放棄地の解消等地域農業の振興に大きく貢献している事例についての講演があった。都築氏からは、農業生産現場での実践事例をもとに分かりやすく説明いただき、新規就農者の定着に向けて、地元の先進的な農家の果たす役割と行政、JA等の農業関係団体の一体となった支援の重要性について再認識する会となった。

最後に、愛知県阿久比町でコメと野菜による農業経営を大規模に展開する有限会社 千姓 代表取締役 都築氏から、自社が行う「独立支援事業」が担い手の育成、確保とともに耕作放棄地の解消等地域農業の振興に大きく貢献している事例についての講演があった。都築氏からは、農業生産現場での実践事例をもとに分かりやすく説明いただき、新規就農者の定着に向けて、地元の先進的な農家の果たす役割と行政、JA等の農業関係団体の一体となった支援の重要性について再認識する会となった。

郡上農林 ■ 就農者支援

新規就農者激励会の開催

農業普及課では1月14日に郡上指導農業士会と共催で就農5年目までの就農者・研修生を参集し「新規就農者激励会」を初めて開催した。就農者の自己紹介と5年後の目標を発言したのち、指導農業士ら担い手リーダーや就農5年以上の先輩農業者、農林事務所、郡

上市、JAがそれぞれの経験からのアドバイスや激励の言葉などを贈った。

地元の先進農家の講演では、6次産業化の取組みに際して付加価値をつけて販売する考え方や苦勞が紹介されるとともに、新規就農者らに「今」頑張るぜひ「ゆめ」をつかんでほしいとのエールが送られた。



【就農者の自己紹介】

下呂農林 ■ 新規就農者 下呂でしか教えてくれない農業研修会第2、3回を開催

下呂地区指導農業士会は、下呂地域担い手育成総合支援協議会との共催により、新規就農者や農業研修生等を対象に「下呂でしか教えてくれない農業研修会」を開催した。第2回（1/14）はGAPの導入について、第3回（1/27）は指導農業士を講師に観光農園の運営のポイントや、市職員からは農業者年金について、県職員から農業経営分析について講演した。2月には第4、5回研修会を開催する。



【研修会の様子】

飛騨農林 ■ 指導農業士 飛躍に向けて！ 古田知事へ花もち贈呈

指導農業士会飛騨支部（小林知明支部長、会員22名）は、12月26日に岐阜県庁を訪問し、古田知事に、飛騨の冬の風物詩である花もちを贈呈した。

飛騨地方の正月飾りの文化を届けるため、平成14年から行っている行事で、古田知事からは「花もちを見ると心新たに今年もリフレッシュして頑張ろうと思える。この花もちを多くの人に見てもらえるよう飾ります。」とお礼の言葉を頂いた。



【知事への贈呈の様子】

■ 普及活動成果 平成26年度普及活動研究セミナーを開催

1月16日（金）、羽島市文化センターにおいて、生産者をはじめ、市町村、関係機関、普及関係者など220名の参加の下、県の普及活動成果を広く県民に知ってもらうとともに普及指導員自身が研鑽を積むことを目的に、平成26年度普及活動研究セミナーを開催した。今回は県下5圏域からそれぞれ、産地づくりや担い手育成、地産地消への取り組みなど5事例の発表の後、本県から福島県に農産物の放射能検査等の支援のために派遣されている小森技術主査からの現地報告があった。

最後に、大分県の普及指導員山崎修一氏から「園芸産地の再生に向けた仕組づくり」と題する基調講演があった。今正に、本県では‘担い手育成プロジェクト1000’で積極的に取り組みを進めており、「とまと学校」等での新規就農者支援を題材に、現場経験に裏打ちされた発表内容に、時間が超過することも忘れるほどの熱心な質疑が交わされた。



【会場の様子】



【パネルによる活動紹介】